

2022年1月25日（火）

老球の細道652号

今こそしっかり根を張ろう

会津バスケットボール協会 室井 富仁

昨年末にはようやくコロナが落ち着き、2022年はバスケットのイベントも普通通りにできるだろうと楽観視したのもつかの間、今度はオミクロン株の第6波に見舞われ、わが会津も危険な状態になってしまった。わが孫娘の名前が「ミク」というので、孫娘は自分の名前をテレビで連呼しているのに大喜びである。

このオミクロン株のおかげで楽しみにしていた会津選手権大会（百井杯）が直前になって中止になった。この状況だと昨年のように色々なカテゴリーの大会が中止になるかもしれない。自然は大寒を過ぎたとはいえまだまだ厳寒の冬、世間は新型コロナオミクロンバージョンの第6波。中止、中止の嵐が吹く。

こんな時に思い出される言葉がある。「何も咲かない冬の日には下へ下へと根を下ろせ。やがて大きな花が咲く」。実業家の後藤清一という言葉であるが、高橋尚子などマラソンの選手たちが座右の銘にしている言葉である。かつて一緒に勤務していた箱根駅伝優勝経験のある先輩先生の机上でもこの言葉を目にしたことがある。厳しい状況にある時こそ基本に返れ、自分を見つめなおせ、原点に戻れということだろう。

バスケットボール選手、コーチも同じである。大会がなくなり、目の目標がなくなり、がっかりするところであるが、ピンチはチャンス。こんな時こそ選手は基本をやり直すこと、コーチは自分のコーチングを見つめなおす好機である。情報、知識が錯綜する昨今、「知っている」と「できる」ことが一致しないことがままある。振り返り、見つめなおすことによって気づくことがある。

「コーチを越える選手は現れない」と言われるが、偉大な選手を育てるためにはコーチ自身が選手以上に切磋琢磨しなければならない。たくさんゲームを観る、ユーチューブなどで新しいスキル、プレイを研究する、クリニックを受ける（現在はあちこちでオンラインクリニックが実施されている）、バスケットボール以外のジャンルから学び新しい発想を得る。

また、選手の気持ちに火をつけるのはコーチの情熱である。練習指導におけるコーチの情熱ある姿勢はもちろんであるが、コーチが話す色々なエピソードにも火をつけられる。

朝日新聞の『かあさんの背中』に東京五輪車いす陸上銀メダルの大矢勇氣選手の話が掲載されていた。中学3年で脳腫瘍がわかり競輪選手を断念。定時制高校に進学し高1の時に解体工事作業中に8階の高さから落下して脊髄損傷し下半身が動かなくなる。人生に絶望し自殺を考えたが、リハビリ病院で自立に向けて一生懸命取り組んでいる人を見て車いす陸上を始める。五輪を目標に母と二人三脚でがむしゃらに練習していたら母が肺がんで死亡。母が死ぬ前に兄に「勇気を世界に連れて行って」の言葉に奮起して東京五輪で銀メダル。

情報のアンテナを張り巡らしていれば、凄い人はどこにでも存在し、自分自身の未熟さ、甘さに気づかされる。挫折、逆境とか簡単に口走ることが恥ずかしい。